

ムツゴロウ目線の有明海再生論：森里海を結ぶ

●文・写真：田中 克（京都大学名誉教授・舞根森里海研究所長）



2020年に予定されていた国連生物多様性条約のCOP15は延期されて未開催です。COP10で掲げた愛知目標を全く達成できないまま10年が過ぎ、それを象徴するようなコロナ禍に世界が見舞われたからです。愛知目標を先導した日本の海でも埋め立てや分断が続いています。しかし希望もあります。今回は森里海のつながりの重要性を科学者として発信し続けてきた田中克先生に、有明海で始まった新たな取り組みについてご寄稿いただきました。

持続可能社会への“試金石”としての有明海

東日本大震災から10年が経過し、溜め込んでしまった膨大な量の放射能汚染水を海洋に放出する既定のシナリオが進行しています。自然を破壊し続ける人間の“懲りない”営みに、新型コロナウイルスは“まだ気づかないのか”との警告を発しました。いのちのふるさと海への畏敬の念を取り戻さない先に確かな未来はありません。時間と空間を通じたつながりの価値観、とりわけ断ち切れ続ける人と人のつながりの再構築が未来へのカギとなる時代に至りました。

沿岸環境と沿岸漁業再生、それらに依拠した持続可能な循環共生社会を築き直す上で避けては通れない試金石が、九州の中央部に位置する有明海です。さまざまな人間社会の傲慢さの積み重ねから“瀕死の海”に至った有明海をかつての“宝の海”に戻せるかどうかは、私たちが抱えた根源的な課題です。

有明海問題を巡る新たな流れ

有明海の生物的再生産にとって不可欠な“子宮”と呼ばれ



写真1 干潟上のムツゴロウ：ひとの営みをどのように見ているだろうか

た諫早湾奥部の広大な泥干潟は、「ムツゴロウが大事か、人間が大事か」との“踏み絵”を漁民に強要し、1997年4月14日に世界を震撼させた293枚の鋼板の連続的な落下により締め切られ埋め立てられました。それから四半世紀の時流れ、今では環境・経済・社会の間に見られるトレードオフ関係を克服して、協調相乗効果の関係への転換が地球的課題の解決の基軸であることが明らかになってきました。ムツゴロウを大事にすれば、人間の地域経済もうまく回るとの価値観が問われています(写真1)。

生態系の分断が地域社会を崩壊させ、漁民や農民だけでなく、“諍いの町”との汚名を被った市民も含め、誰も幸せにできなかった国営諫早湾干拓事業を、この国の行く末を見直す根源的な課題と位置付け、日本環境会議(寺西俊一委員長)が2020年4月に諫早湾干拓事業検証委員会を立ち上げました。そこでは、検証結果を有明海問題解決への「提言」として公表し、世論の喚起を図る作業が進められています。その流れの中で、建築業界の雑誌「建築ジャーナル」誌4月号にも特集「1997年4月14日を忘れない諫早から日本が見える」が掲載されました。

有明海が宝の海であった源：森里海連環の世界

有明海は我が国を代表する典型的な内湾として、極めて高い生物生産性(漁業生産性)と生物多様性を誇っていました。その基盤は汽水と濁りと干潟の海であり、九重・阿蘇山系から湾奥部に流入する筑後川から悠久の時を通じてもたらされる大量の淡水・栄養塩類・微量元素・土砂・微細鉱物粒子などにあります。有明海には今から16,000年ほど前まで続いた最終氷期に移動してきた大陸沿岸性の水生生物が、温暖化による大陸と日本列島の分離後も、ふるさとの海に類似した汽水と濁りの海、有明海湾奥部に遺残り、“大陸沿岸遺存種”として注目されています(佐藤、

2000)。筆者は、日本ではこの海にしか生息しない多くの特産種の再生産の舞台となる筑後川河口域において稚魚の生態に関する研究を続け、個々の生き物が偶然的に有明海に遺残ったのではなく、遺存種同士の捕食-被食関係を軸とするつながりの総体が有明海に遺存したとの「大陸沿岸遺存生態系説」を提唱しました(田中、2009)(図1)。

有明海を瀕死の海に至らしめた主原因

かつての有明海は“宝の海”と呼ばれ、漁師は「有明銀行」と称して、その豊かさを享受してきました(写真2)。しかし、生物生産性の豊かさは、富栄養化による劣化と表裏の関係にあり、20世紀後半には高度経済成長の負荷が重なり、急速な劣化が生じました。筑後川下流部の河川敷から国土のインフラ整備のために膨大な砂が持ち出されました(図2)。有明海に流れる砂が減って干潟の更新が停滞し、底生生物による浄化能力が減退しました。筑後川下流域には、福岡大都市圏の水不足を解消する目的で1985年に筑後大堰(写真3)が建設され、本来は有明海に流れて海の生き物を育む水とそこに含まれる物質が取り上げられ続けています。そして、ムツゴロウより人間の方が大事とばかりに諫早湾奥部の広大な干潟の埋め立てと、それを実施するための全長7kmにも及ぶ諫早湾潮受け堤防の設置が巨大公共事業として断行されました(写真4)。

本質としての森と海の連環の分断

このような有明海全域での大規模な環境変化が重なり、宝の海は瀕死の海に至りました。従来、筑後川からもたらされる鉍物粒子は反時計回りの恒流に乗り、最も細かい粒子が諫早湾奥部



図1 有明海の全景と代表的な特産的魚類



写真2 諫早湾奥部の干潟はアゲマキなどの生き物の宝庫として地域の暮らしを支えた(写真提供: 中尾勘悟)

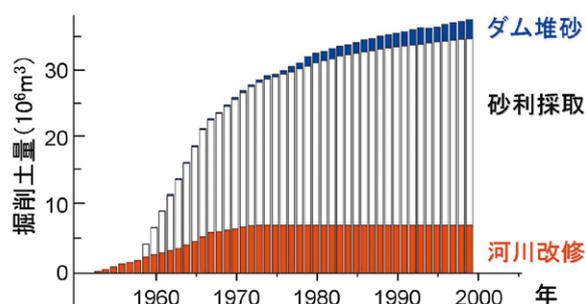


図2 筑後川から持ち出された砂の量(横山ほか、2007)



写真3 1985年に筑後川河口から23km上流に、福岡都市圏に水を送るために建設された筑後大堰



写真4 諫早湾奥部の広大な泥干潟を干拓するために建設された全長7kmの潮受け堤防

に流れ着き、きめの細かい泥干潟を形成し続けて来ました。有明海全体として山が海と不可分につながる連鎖の世界の崩壊が、瀕死の海の根源です。

それは、目先の、その場の、その時の都合で見かけの経済の成長や暮らしの利便性ばかりを追い求め過ぎた私たち「里」の営みの結果です。先述の有明海を瀕死の海に至らしめた大規模改変の問題の本質は、人間による森と海の分断そのものなのです。それを見極めないことには、解決への道は開けないといえます。

有明海再生のカギを考える

日本は森林が国土の3分の2を覆う森林大国であり、同時に亜熱帯域から亜寒帯域にわたり、多くの島嶼にめぐまれた海洋大国でもある、地球の原型的立地条件を備えた自然豊かな国と言えます。今地球が抱える根源的課題、いかに再生自然資本を循環的に活用した持続可能な社会を築くモデルを生み出し得るかという、大きな地球的役割を担っているのです。それは、森里海連環学のめざす道であり、森里海連環の有明海と周辺地域社会を再生させる課題そのものだといえます。そのカギを握るのは、森と海の間に暮らす私たち「里」の営みそのものであり、人々のつながりの価値観の再生です。

そのためには、すぐに役立つものや見えるものばかりに価値を置き、物事が成し遂げられる過程を軽んじて、結果さえよければよしとする現代社会の価値基準を根本的に見直すことが求められます。それには3つの視点、長い時間スケール、広い空間スケール、そして総合的・多様性重視の視点が必要です。そうした視点を包含した具体例は、宮城県気仙沼のカキ養殖漁師、その代表としての畠山重篤さん

が1989年に始めた「森は海の恋人」運動だとみなされます(写真5)。山に登って木を植えると海への思いが募り、この木が育てば自然がよくなり、子供たちや孫たちの幸せにつながると思いが自然に膨らみます。

新たな流れを生み出す

しかし、有明海・諫早湾を取り巻く現実は大変厳しいといえます。誤りがあっても後戻りさせないために意図的に農業と漁業の対立構図が創り出されました。干拓地に入植した農民の中から、潮受け堤防の水門を開けて周りの調整池を海に戻し、冬には冷却化し夏には高温化する環境を元に戻すことが、干拓地農業にとって不可欠との声が上がっています(松尾、2019)。多くの裁判が同時に進行していますが、裁判のみでは地域社会の蘇生はあり得ないでしょう。裁判で決着がついたとしても、関係者間には根強い“しこり”が残り、地域社会が協働の方向に直ちに向かうことはあり得ないと思われます。

熊本県球磨川下流部に設置されていた荒瀬ダムは、2018年に日本で初めて撤去されました。それに伴う球磨川と支流の環境は大幅に改善され、アユをはじめ多くの生き物が復活し、河口域ではアオノリの成育が著しく良くなるなどの目に見える変化が生まれました。ダムの撤去を巡って賛成・反対で対立していた住民は、目の前の「対立物」がなくなり、川の再生を目の当たりにして、対立を乗り越えて蘇った自然を生かして地域を元気にしようとの協働の環が生まれたのです(つる詳子氏談)。

有明海の再生を担う潮受け堤防開門問題のみに近視眼的に捉われていては未来世代への思いは生まれてきません。森は海の恋人運動のように、一度山に登って諫早湾全体を



写真5 岩手県一関市で毎年6月に開催される「森は海の恋人」植樹祭



写真6 2020年3月20日に多良岳中腹で開催された第1回森里海を結ぶ植樹祭

眺め、そこに注ぐ水を涵養する山に木を植え、続く世代の幸せを皆で願う視野が必要と感じられました。そこで、2020年3月20日に諫早湾を見渡す多良岳中腹に、有明海と周辺地域社会の再生を願う人々が集い、クヌギの苗700本を植える「第1回森里海を結ぶ植樹祭」を実施しました(写真6)。迫りくる新型コロナウイルス感染の波を考え、参加を地元の「多良岳に感謝の会」の皆さんや関係者に限った植樹祭になりましたが、気仙沼から駆けつけてくださった畠山重篤さんを囲んで大いに盛り上がりました。

いのち育む時代へのキックオフ：森里海を結ぶフォーラム

その植樹祭には、全国から多くの協賛が寄せられました。その思いを痛感した植樹祭主催者は、全国の志を同じくする人々とつながり、実行委員会を立ち上げ、第2回植樹祭を核に、森は海の恋人講演会、森里海を結ぶ全国交流会、絶滅危惧種円卓会議を加えた「第1回森里海を結ぶフォーラム」を2021年4月初旬に諫早市において実施すべく諸準備を進めてきました。あいにく、コロナ感染の第4の波が来るとの予測の元に、半年先にスライド延期し、10月初旬に開催することになりました。

このフォーラムを、「いのち育む時代」へのキックオフとして諫早市において開催し、今後その流れが定着すれば、諫早市はその流れを生み出した地として歴史に名を残し、「自然復元の町」として再興できるのではないかの思いを膨らませています。

諫早湾ウナギのいる川・いない川水生生物調査

全国の支援のもとに全国協働の環を広げるイベントとともに、今後は地元で根差した取り組みが求められます。その柱の一つは、多良岳中腹での植樹祭活動の継続であり、そこから生み出される水が諫早湾に流れ、海の生き物のいのちにつながる過程を市民が調べ、その科学的データに基づいて、住民自身が自分たちの将来を選択しうる道を開くことが不可欠と思われれます。

認定NPO法人アースウォッチ・ジャパンが進める野外調査プログラムに「諫早湾ウナギのいる川・いない川水生生物調査」を乗せ、潮受け堤防の外側に注ぐ長里川にはニホンウナギが生息するのに対し、内側に注ぐ境川にはニホンウナギもその餌になるカニもないことを市民参加型の調査を通じて明らかにする計画を立てています。諫早市は今でも「ウナギの町」としてゆるキャラを作って売りだしています。

しかし、潮受け堤防によって今ではシラスウナギは諫早湾内に入ることはできず、諫早市を流れる本明川には天然ウナギは生息していません。ウナギのいないウナギの町か、ウナギを復活させたウナギの町のどちらが確かな未来を保障するのか、市民に判断してもらいたいと願っています。

平和のメッセージを送るムツゴロウ

分断・対立・紛争の絶えない世界が広まる中で、ムツゴロウはその風貌と言ひ、無尽蔵の付着珪藻類をついばみ、のんびりとした干潟の暮らしと言ひ、私たちに多くのメッセージを送ってくれています。ムツゴロウは森里海がつながる世界の生き証人のような存在です。彼らの食料、泥の表面に生きる付着珪藻類は、太陽光、水、二酸化炭素、栄養塩類、微量元素によって増殖し、干潟を緑の草原にしています(佐藤、2014)。森里海がつながる世界は平和の源であることをよく知っているようです。彼らの平和のメッセージをしっかりと受け止めたいものです(写真7)。



写真7 干潟のアーティストムツゴロウからの平和のメッセージ

●参考文献

- 佐藤正典編 2000.「有明海のいきものたち」海游舎
- 佐藤正典 2014.「海をよみがえらせる」岩波ブックレット
- 田中 克 2009.有明海特産種：氷河期からの贈り物。「干潟に生きる魚たち」東海大学出版会
- 松尾春春 2019.諫早湾中央干拓地で農業に生きる。「いのち輝く有明海を」花乱社



田中 克 たなか・まさる

1943年滋賀県生まれ。
稚魚に導かれて「森里海環遊学」を提唱。三陸の海と有明海の再生に関わる。「森に暮らして、海を想い、行動する」道を求める。舞根森里海研究所長。